あとがき

一九九五年、一月一七日、未明。突然の衝撃が眠りを直撃し、その直後、枕元にうずたかく積まれた本が落ちてきた。びっくりしてベッドに起き上がったのだが、文化住宅二階の部屋ははげしく揺れて、立ち上がることもできずに、ただ呆然と地震がおさまるのを待つしかなかった。

やがて地震はおさまり、停電した暗い部屋を眺め回すと、本棚から本は散乱し、重いスピーカーは倒れて、足の踏み場もないほどの様子だったけれども、暗い部屋でどうすることもできないので、とりあえず寝た。落ちてきた本にベッドの半分を占領されたので、猫のように丸くなって。

やがて停電は復旧し、目覚めると、部屋は廃虚だった。足場がないのでファンヒーターに足をかけて台所に入ろうとすると、ボコッとファンヒーターの頭部がへこんだ。台所の水屋は倒れ、食器は割れて散乱し、しょう油やソースが床に流れていた。とりあえず床を拭き、コーヒーを飲みながら廃墟を眺めていた。復旧にはしばらく時間がかかる…。

あまりと言えばあまりの無防備な対応だったのだけれども、それが史上有数の被害をもたらした兵庫県南部地震を茨木市で体験した僕の対応だった。

部屋は手着かずのまま、ミニバイクで職場へ向かう。道路は渋滞していたけれども、まさか高速道路が閉鎖されているとは知らなかった。トラックで街へ出ると、渋滞はもちろんだけれども、あちこちの公衆電話には行列ができ、ラジオからは被害の状況を知らせる報道が続々と流れていた。死者は三百数十人。その夕方には四百人を越え、翌日には千五百人を越えた。

テレビは被災地の生々しい映像を送っていた。倒壊した家屋、崩壊したビル、傾いたビル、崩れ落ちた駅。そして倒れた高速道路。闇の中に燃えさかる炎。陥没したニュータウン。戦災よりも怖かっ

たという被災者の声。死者は四千人を越えた。
廃墟。崩壊する記号。そして噴出する唯物論…。

熱してまだ冷めてはいない記憶（それどころか被災地では現在進行形の災難なのだ）を思考の種にするというのは気がひけるし、またその準備もない。僕はただ体験と（メディアを通じての）目撃をここにメモしておきたいと思うだけだ。またこの中国散歩報告と今回の兵庫県南部地震とは僕にとっては深い関わりがあるという直観がある。このⅢにおいて、僕は昆明の下町で出会った廃墟（工場の跡地）のことに少し触れた。何故かは分からないがしばらく見入られたように立ちつくし、おまけにその写真さえ掲載した。中国旅行の本題からいえば余計なものだったかもしれないけれども、僕はそこに何かを感じる。そしてその何かを、Ⅳにおいて少し触れることになるけれども、河西回廊の砂漠に、そして蘭州の街を流れる黄河にも感じるのだ。それは記号の絶句、記号の廃墟、あるいは記号的秩序の裂け目から覗き見る唯物の深淵、あるいは裂け目から噴出する唯物論とでも言えるかもしれない。

板子一枚下は地獄、という言葉を僕は思う。情報化社会とはいっても、僕たちは薄膜のような薄い層（地表）に暮らしている。記号的な世界というのは実は二次元的（平面）な世界ではないかと、ふと僕は思う。情報化社会の板子一枚下は地獄かどうかは分からないけれども…。

一九九五年一月二二日